

# みんなの居場所

## 裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年9月1日(月)

## 雑感

昨今の世の中、「ミニコミュニケーション能力が推し進められてきている」と思っている。言動が粗暴なのが一つの特徴だ。そのような子どもは友人関係において何らかのトラブルを引き起こしている。では、「ミニコミュニケーション能力を高める」ために何をすればよいのか？ 手取り早いのは、直接のコミュニケーション機会を増やし、互いの表情や言葉の様子を感じ取りながら、相手の感情に寄り添いつつ自分の言動を選んでいくことだ。また、これは自然に身に付くものではなく、我々大人がお手本を見せることも重要である。大人は子ども達にとっての身近な言語環境であることは間違いない。企業の採用担当者は「コミュニケーション能力が高い」ということが多い。「ミニコミュニケーション能力は採用に際して非常に大きなポイントになる。」

そもそも、子ども達の「ミニコミュニケーション能力の推し進め」は「こころいへるのか？」多くの要因があるが「SNS依存」「親子の相互依存」等が考えられる。大人が先回りして子どもを守り過ぎたり、お世話し過ぎたりするのは、子どもの成長の妨げになる。放任でもなく溺愛でもなく、中間が良いのだが、その塩梅は難しい。

## 高学年へのメッセージ

### 「思春期の入り口」

子どもの頃、夏休みが終わると急に大人びた印象の友達が出てくる。それが思春期の入り口。よくあることなので、保護者の皆様にもご経験があるのではないのでしょうか。

高学年の子ども達の心や体はどのように変化しているのでしょうか。この時期、体の変化に伴って心にも微妙な変化が生じてきます。いわゆる思春期です。目標が明確であれば素晴らしい効果をあげる時期でもあります。欲や本能だけで行動すると悪い結果を生ずる時期でもあります。

思春期の典型的な行動パターンとして、まず親とは違った価値観を身に付けていく傾向があります。大人への「反抗的態度」が出現します。また、見た目が気になるようになります。周りの友達に比べているか、とても気になるようになります。髪型も同じです。整髪料を使ったり染めたりする子どももいます。また、周囲に認められたいとして自分のキャパシティ以上に張り、そのストレスに耐えきれず、不安定になることもあります。

私にも娘がいてそういう時期がありました。高校生活だった娘に「言いました。その時その時に似合う姿があるの、何となく自信がないの？」娘は黙っていました。思春期の背伸びは理解できません。言動や表情が魅力となっていくのです。「醜い出」ものが魅力であると思えます。

子ども達もまた、自分自身の将来にどのような影響が出てくるのかを知っておかなければなりません。中学校になって、反抗的な態度ばかりになったり、見た目に気を遣い過ぎたり、ルールが守れなかったりすれば、その後の人生に影響が出ます。「家庭の回廊の話題」にしてみてください。大切にしてほしいものです。

## シリーズ「自分を語る」#300

「VH（中心静脈点滴）」の処置後、看護師さんが点滴を持って来られました。高カロリー輸液云々と書かれたので、ビールバックでした。当時の普通の点滴はガラスの瓶に入っている物が多く、ビールバックでしかもあまりに大きいものだったので、家族もびっくりしていました。何も食べないで先ずは週間…。想像もつかない入院生活が始まったのです。24時間点滴なのでいつも輸液はそばにありま。ちょっと想像してみてください。点滴をぶら下げる様があって、足元には車輪がついているもの、私はそれをどこへ行くにも連れて行くのです。面会でも、トイレを見るにも、売店に行くにも、トイレに行くにも全々それを「ロロロロ」とはって行くのです。お陰で、看護師さんからはトイレに行っている時でさえ見つかった。病棟の廊下で「澤田さんはどこにおりますか。」と大声で呼び始めました。私には「トイレ」も無い時間でした。

それよりも辛かったのは、物が食べられないことでした。とにかく、胃や腸の中は空っぽで、空腹感があります。病室は6人部屋、当然のことながら他の患者さんは食事を摂られる訳です。お見舞いの方々も私が食べられないのを知っている。持ってきたものは本が多かったです。でも、周りの患者さんは違いました。お見舞いの品物が殆ど食べ物で、食べられない私には酷でした。お裾分けで頂いても、食べることはできません。頂いた物は全て家族が持って帰りました。私は、朝食時は別の点滴が追加されるため病室にいましたが、食後、夕食時は、居たままになって一階受付にあるエレベーターを見に行ったり、屋上に行ったり、談話室で本を読んだりしていました。当時の手帳には面白い記事が残っています。それは食べたい物一覧です。そこに書いてあるものが自分でも笑っています。かなりのリアルな記事で、その一例を紹介します。「香梅のクリームパフ」「焼きたての「ロロ」出前」「梅干し」「カール（スナック菓子）」…。実はこれ、同室の患者さんやお見舞いの方々が食べていた物ばかりなんです。あんなに人が食べるものを美味しそうに目つき羨ましそうに見たのは、あの時以外ないでしょう。ロロロロは水とお茶、食事がスタートして3日目くらいから残渣の無い「100%果汁のリン」ジュースが一日に1回あったように思います。この「リン」ジュースが最大の「馳走」でした。だから、ゆつくり味わって飲みました。少し口に含んで暫く味を楽しみます。そして少しづつ喉を通すのです。子どもみたいなことをやっていた訳ですね。

食べ物当たり前に食べられるという事は、実は有難いことなのだと感じた経験でした。今でも、「飯粒を残す事は私の心の中ではあり得ない」と、子ども達が給食を食べる時の姿を見ているときに悲しくなることがあります。「これは嫌い！」と大声で叫ぶ子ども、給食センターの方々が聞いたら悲しくなります。保護者の皆様、子どもの食習慣は大人の習慣が影響しますので、見直しをお願い致します。

さて、痛みを感じてから5日後は過ぎた頃、当時勤務していた龍田小学校の校長先生と教頭先生がお見舞いにいらしていました。神妙な面持ちです。私は何となく状況を悟りました。(つづ)